

管内と畜場で見られた豚サルモネラ症について

東総食肉衛生検査所 黒田順子 片山雅一 樋泉礎

Salmonella Choleraesuis(以下 SC とする)を原因とする豚サルモネラ症は、肺炎を伴った急性の敗血症であり、下痢はあまり認められない。主に4ヶ月齢までの幼豚に見られ、その発生には密飼い、輸送等の各種ストレスが関与し、致死率の高い事例も報告されている。

我が国では1928年に初めて報告され、1990年以降、野外の発生は増加し、各地で見られるようになった。一方、と畜検査においても、一昨年年辰ら¹⁾が発生事例を報告している。

今回、千葉県内のと畜場では初めて、平成15年1月から7月にかけて肝臓の白斑を主徴とした検体3例からSCが分離されたので、その概要を報告する。

【症例の概要】

	症例1	症例2	症例3
発生年月日	1月30日	3月13日	7月18日
発生場所	管内Aと畜場	管内Bと畜場	管内Cと畜場
搬入形態	一般畜	病畜	一般畜
生体所見	著変なし	削瘦、横臥、発熱	著変なし
解体所見	肝に白斑が密発 肝門Ly充出血	肝に白斑が密発・出血斑あり 胃腸萎縮、内腸骨Ly充出血	肝に白斑・出血斑あり

【材料および方法】

(1) 検査材料

症例1; 肝臓, 脾臓, 腎臓, 気管・気管支Ly, 肝門Ly, 腸間膜Ly

浅頸Ly, 内腸骨Ly, 腸骨下Ly, 膝窩Ly

症例2; 肝臓, 脾臓, 腎臓, 心臓, 胃肝門Ly, 腸間膜Ly

浅頸Ly, 内腸骨Ly, 腸骨下Ly, 膝窩Ly

症例3; 肝臓

(2) サルモネラ検査

直接培養と選択増菌培養を併用した。

直接培養; クロモアガーサルモネラ寒天培地, DHL 寒天培地, 5%馬血液加寒天培地
各37℃, 18~24時間

選択増菌培養; ラパポートバシリアディスプレイオン42℃, 18~24時間

以降, 食品衛生検査指針に準じた方法で実施。

(3) 敗血症検査

定法に従い, 5%馬血液加寒天培地にて37℃, 48時間好気および嫌気培養を実施。

(4)トキソプラズマ検査

断面をスライドグラスにスタンプリ、ギムザ染色およびヘマカラー染色を実施。

(5)病理組織学的検査

20%中性緩衝ホルマリン液で固定後、パラフィン包埋、薄切し、HE染色を実施。

【結果】

	症例1	症例2	症例3
SC分離	肝臓, 脾臓, 腸間膜 Ly 気管・気管支 Ly, 肝門 Ly	肝臓, 脾臓	肝臓
他の細菌分離	陰性	陰性	陰性
トキソプラズマ病	陰性	陰性	陰性*
病理組織所見	チフス結節	チフス結節	チフス結節

* 病理検査にて確認

【考察】

今回 SC が分離された3例において、肝臓に針頭大～粟粒大の白斑および出血斑が見られたものの、一部のリンパ節に軽度の腫脹と充出血を認めただけで、非定型抗酸菌症、トキソプラズマ病を強く疑う所見はなかった。1例では肝臓以外に全く著変は見られなかった。精密検査を行ったところ、肝臓およびその他の臓器、リンパ節から SC が分離され、病理検査では肝臓にチフス結節が見られたことから、豚サルモネラ症と診断した。天辰らは、肝臓、脾臓以外にあまり病変が見られないこと、肝臓の白斑は針頭大～粟粒大で複数の小葉をまたがることはまれであること、病変部以外の臓器およびリンパ節からも菌分離されると報告している¹⁾。これらは今回の症例と同様であった。しかし一方で、肝臓、脾臓以外に肺や腎臓に病変を認めた例も報告している¹⁾。本症例では病変は肝臓のみであったが、と畜場で発見される SC はほとんどが不顕性感染し耐過した豚であることから、このようなばらつきが見られると思われた。これらを踏まえた上で、肝臓に白斑が見られる検体に対し、SC によるサルモネラ症を疑った精密検査を積極的に実施していくことが重要であると考えられた。

近年、野外、と畜検査における SC の報告は増加しており、一方では人への感染も報告され、海外では免疫抑制状態の人への感染が問題となっている。今後はと畜検査において SC の排除に努めるのはもちろんのこと、管轄家畜保健衛生所に対して迅速に情報をフィードバックするなど連携を図り、生産現場における指導も行いながら、より安全な食肉の供給に心掛けていきたい。

【参考資料】

(1)天辰健一：平成14年度食肉衛生技術研修会・衛生発表会資料，82-84(2003)